

非感性的完結化と知覚的現前

源河亨 (Tohru Genka)

慶応義塾大学大学院文学研究科

本発表は、非感性的完結化(amodal completion)についての検討を通して知覚的現前について考察する。そして本発表の目的は、感覚的でない知覚的現前（色なしに対象が見える、感覚的でない性質が知覚される、など）があると主張することである。

私たちが周りを見渡すとき、さまざまな対象を見ることができる。だが、そうした対象の全ての側面が一度に感覚的に意識に現前しているわけではない。たとえば、目の前にあるパソコンに目を向けるとき、パソコンの向こう側にある壁も目に入っている。その壁は手前にあるパソコンによって一部が隠され、隠れている部分がどういう色をしているのかは、今いる場所からはわからない。にもかかわらず通常私たちは、隠れている部分にも（色はなんであれ）壁があるということを疑っていない。私たちは、隠れている部分にも、隠れていない部分と連続する対象の一部が存在しているという拭い難い印象をもつ。こうした現象は非感性的完結化(Kanizsa 1979)と呼ばれる（以下、「完結化」）。完結化は、隠れている部分も何らかの仕方で私たちの意識に現前していることを示している。では、どのような仕方で意識に現前しているのだろうか。

一つの考えは、隠れている部分は「隠れている部分にも何かある」という信念に含まれることで現前しているというものである。また、心的イメージを通して現前していると考えられることもある(Nanay 2010)。そして、知覚の行為性を重視するエナクティブ・アプローチ(Noë 2004)は、隠れている部分は、「もし裏側に回ればその対象の裏側が実際に見えようになるだろう」というような行為可能性に関する感覚運動技能を介して、アクセスまたは予期されることによって現前していると主張する（このアプローチによれば、感覚運動技能を介したアクセスは知覚である）。

本発表はまず、こうした立場が完結化に伴う現象的な特徴をうまく扱えていないということを明らかにする。信念やイメージに基づく理論に対しては次のように言える。信念やイメージに含まれる対象は、完結化が実際に生じている場所以外の所に投影することも可能であるが、完結化は特定の場所をもつような仕方で現前せざるをえない。また、信念やイメージの対象はたとえ目を閉じていたとしても意識に現前しうるが、完結化は当該の部分に目を向けなければ生じないような現象である。エナクティブ・アプローチに対しては次のように言える。完結化は、裏側に回ったりすることが原理的に不可能であるような二次元図形にも生じうる。そのため、行為可能性によって完結化を説明することは不適切なのではないか（むしろ、行為可能性は知覚的現前があることによって得られるものであり、行為可能性によって知覚的現前を説明するのは順番が逆なのではないか）。

信念やイメージに基づく理論の問題から示唆されるのは、完結化は（エナクティブ・

アプローチとは異なるものの) 知覚的現前として扱わなければならないということである。というのも、空間上のある位置に定位せざるをえないことや、特定の場所に目を向けなければ現前しないということは、知覚的現前の重要な特徴であるからである。

(たとえば、机を見る場合、その机は特定の空間的位置をもつ仕方で意識に現前せざるをえないし、机があるまさにその場所に目を向けなければ机は現前しない。)

そのため本発表は、「派生的な知覚経験」という枠組みを使った説明を提案する。それは、モダリティに固有な感覚的性質(視覚なら色、聴覚なら音色、など)が特定の仕方(時間的・空間的パターン)で知覚的に現前したときに、そうした現前から新たな知覚経験が派生するという考えである。たとえば、完結化が生じるためには、一部が隠れている対象(の隠れていない部分)と隠している対象とが特定の位置関係にあることが必要である。こうした条件が揃うことで派生的な知覚経験が生じ、その経験に含まれることで、隠れている部分は知覚的に現前すると考えられる。

派生的な経験を知覚経験だと考えなければならないのは、すでに述べたように、完結化が知覚経験に備わる特徴をもっているからである。しかし、知覚経験についての直観に基づいて、派生的な経験が知覚であることに反論することができるかもしれない(完結化によって現前する部分自体は色などのモダリティに固有の感覚的性質を備えていないが、そうした性質を備えていないものは知覚されていないのではないか。隠れている部分からの感覚刺激がないため知覚とは言えないのではないか、等々)。こうした反論をいくつか検討し、どのような再反論が可能であるかについて考察する。

以上の考察から導かれる一つの帰結は、知覚と思考の境界について再考しなければならないということだろう。感覚的性質を欠くものは知覚ではなく思考の対象として意識に現前していると考えられることがしばしばある。しかし、派生的な知覚経験の枠組みが正しいならば、感覚的でないものも派生的な仕方知覚的に現前しうると考える動機づけが与えられる。

参考文献

- Briscoe, R. (2011). 'Mental imagery and the varieties of amodal perception', *Pacific Philosophical Quarterly*, 92 (2), 153-173.
- Kanizsa, G. (1979). *Organization in Vision: Essays on Gestalt Perception*. New York: Praeger. (野口薫監訳『視覚の文法 ゲシュタルト知覚論』, サイエンス社, 1985年.)
- Michotte, A., Thines, G., and Crabbé, G. (1964) 'Amodal completion of perceptual structures', in G. Thines, A. Costall, and G. Butterworth (eds), *Michotte's Experimental Phenomenology of Perception*. Hillsdale, NJ :Lawrence Erlbaum, 140-167.
- Nanay, B. (2010) 'Perception and imagination: Amodal perception as mental imagery', *Philosophical Studies*, 150 (2): 239-254.
- Noë, A. (2004). *Action in Perception*. The MIT Press.
- Sorensen, R. (2008). *Seeing Dark Things*. Oxford: Oxford University Press.
- 源河亨 (forthcoming). 「音の不在の知覚」, 『科学基礎論研究』.